

## 笠置山勝一の相撲観 —戦時期の「国技」をめぐる言説—

### An Overview of the Sumo of Katsuichi Kasagiyama —A Discourse upon the Wartime ‘National Game’.—

胎中 千鶴  
Chiduru TAINAKA

*Keywords* : sumo, Katsuichi Kasagiyama, national game

キーワード : 相撲、笠置山勝一、国技

#### はじめに

笠置山勝一（かさぎやま・かついち 1911～1971）は、1930～40年代に大相撲で活躍した力士である。当時としては非常に珍しい大卒の「インテリ力士」で、最高位は関脇、小兵ながら理詰めには徹した取り口が人気を集めた。文才にも恵まれた彼は、本業以外にも講演や執筆活動を精力的におこない、相撲評論やエッセイ、旅行記、相撲指導書など多くの著作を残した。

1930年代～40年代の戦時期、日本社会では「日本精神」を象徴すべき「国技相撲」のありかたに議論がおこり、依然として娯楽的要素を払拭できぬまま模範を示せていた大相撲に対して、世間の批判が集中していた。その一方、大相撲とは一線を画した形で、教育現場での指導を念頭に置いた学童相撲や、植民地・占領地での普及を視野に入れた原理的な相撲の普及が提唱されるなど、新たに誕生したオルタナティブな相撲への国民の関心も高まっていた。

そうしたなかで、ことあるごとに雑誌メディアなどから意見を求められた笠置山は、大日本相撲協会（以下、「協会」と表記）に所属する現役力士でありながら、国技相撲とはどうあるべきか、戦時期の協会の役割とは何かといった、相撲と大相撲の本質にかかわるような問題について、否が応でも意見を表明せざるを得ない状況に身を置くこととなった。彼が残した著作物からは、自分に与えられた社会的役割を十分に自覚しているからこそその苦悩や奮闘ぶりが、真摯な筆致を通して伝わってくる。

笠置山の言論活動は、本場所や地方巡業、大陸巡業や皇軍慰問など、力士として欠かせない日々の務めから体得した経験値を土台に、論理的かつ客観的に国技としての相撲や大相撲のありかたをとらえ直したという点で、他に類をみないユニークなものである。時に協会批判も辞

さず、自身の相撲観や協会改革案を表明しつづけた彼の言説を同時代の他の相撲論と比較・検討することは、当時の日本社会が、戦時ナショナリズムの発露としての国技相撲に何を求めたかを考えるうえでも有効であろう。

歴史学の立場から戦時期の相撲界や笠置山について論じたものとしては、すでに赤澤史朗と新田一郎の労作がある<sup>1)</sup>。本論はこれらの先行研究に大いに依拠しつつ、これまで取り上げられることが少なかった笠置山の外地（朝鮮、中国、満洲国）経験にも言及し、それが彼の相撲観に与えた影響なども視野に入れて再検討する。

なお、本論で引用する資料は、読みやすさを優先してすべて新字体に改め、句読点を補った。

## 1. 戦時期の相撲界と笠置山

### (1) 笠置山の言論活動

笠置山は1911年（明治44）奈良県生まれ。本名を仲村勘治という。小学校時代から相撲で頭角を現し、県立郡山中学在学時に力士を志すようになった。中学では柔道に打ち込み、一方で4年間級長を務めるなど地元では文武両道で知られた<sup>2)</sup>。1930年（昭和5）に第一早稲田高等学院から早稲田大学専門部政経学部に転入、大学在学中の1932年（昭和7）に出羽海部屋から初土俵を踏み、幕下付け出しとなった。翌33年（昭和8）の春場所で十両、その後幕下に陥落するも一場所で復活し、35年（昭和10）春場所では西十両三枚目で全勝優勝を果たした。身長は175センチ弱、体重100キロ余りと体格には恵まれなかったが、左四つと寄り切りを得意として幕内で頭角を現していく<sup>3)</sup>。37年（昭和12）関脇に昇進、一場所で平幕に戻ったが、その後も1945年（昭和20）の引退まで平幕上位の地位を維持し続けた。

彼の言論活動は、入幕直後の1935年（昭和10）頃からみられ、活動内容は主に講演と雑誌寄稿および座談会である<sup>4)</sup>。講演は入幕当初から依頼があったようで、新聞社や早稲田大学主催の社会人対象のものから、巡業先の学校で児童向けにおこなうものまで、内地のみならず植民地朝鮮などの外地でも頻繁におこなっている。

雑誌原稿と座談会は、協会の機関誌『相撲』、スポーツ雑誌『野球界』『アサヒ・スポーツ』のほか、『中央公論』『改造』など多くの紙面に掲載された。なかでも『野球界』は、早稲田の同窓である池田恒雄（のちのベースボールマガジン社創立者）が37年から編集長に就任したこともあってか笠置山の登場回数が多く、1940年（昭和15）前後からは急激に増加、毎号のように評論やエッセイ、座談会に彼の名前が見られるようになる。

たとえば1942年（昭和17）年『野球界』（月2回発行）では、1～6月までの半期12号分のうち、目次に笠置山の名がないのは2号と9号の2回のみで、他の号には相撲評論（6回）、座談・対談（4回）、随筆（1回）が掲載されている。これらの評論のタイトルをみると、単なる本場所の相撲解説にとどまらず、「戦時体制下における相撲道」「大東亜戦争と相撲」「相

撲と必勝の信念」など、太平洋戦争勃発直後の戦時色を濃厚に反映した時事的なものも多い。座談・対談も同様で、「大東亜戦争と相撲」「大東亜・新しき相撲道」など、相撲と国策の関係を論じる場に何度も登場している。

しかしこうした堅苦しい論題や議論の場においても、笠置山の発言は、おしなべて論理的かつ簡潔でケレン味がない。文化人や官僚、政治家との座談会では、謙虚な態度を崩さない半面、率直な意見を理路整然と表明する場面も多くみられる。こうした彼の文才と品性は、当時の知識層に「これまでにない知性をもった新しい力士像」<sup>5)</sup>をイメージさせるに十分だった。

相撲を知的に語れる笠置山は、彼と対談した文化人たちにも好評だった。たとえば相撲ファンとして知られた小説家の尾崎士郎は、笠置山について、「私の求めていたものが、初めてここに出て来たという感じがします。自分が求めて居る文学と相撲の精神と合致した…古い言葉で言えば文と武が合致したという感じ」<sup>6)</sup>と評価している。

とはいえ笠置山にとっては、このように本業以外の業務が増加すると、稽古の時間の確保にも苦勞し、本場所での成績にも影響する。彼自身はそうした本末転倒を恐れ、幕内上位の座を維持することにこだわった。その心情を次のように吐露している。

理論というものは実際と合致しなければならんということだと思う。それで私はいつも苦しむのは、こういう風に相撲以外のいろいろな仕事をしていますね。練習しなければ相撲に勝たなくなって来る。勝たなくて幾ら小言をいっても通らなくなって来る。私の言った理論というものは結局実際に相撲に於て勝たなければならん。そこに非常に苦しみがある<sup>7)</sup>。

自身の相撲論を土俵上の実戦で成果として示し、その経験値に基づいてさらなる相撲論を紙面で展開するという理論と実践の往還こそが、彼のめざすところだった。幕内での相撲にこだわるのは、「私が幕下ぐらいの人間だったら、誰も聞いて呉れません。なんだあいつ生意気なことを言っている。実際私が土俵上で体験して発表したからそれだから価値がある。皆が喜んで呉れる」<sup>8)</sup>という意地と信念に基づいていたのである。

そのため笠置山は、周囲が自分に「頭脳派力士」のレッテルを貼りたがることを嫌がり、そうした質問をする記者に「頭で相撲が取れるものか」と一喝する場面もあったという<sup>9)</sup>。

こうして周囲の期待を受けた彼は、現役力士を代表する唯一の知的な存在として、戦時期における国技相撲のありかたや、大相撲と大日本相撲協会の現状批判と改革案などを論じる立場に置かれた。次章では彼がこれらの問題についてどのような議論を展開したかを詳述する。その前に次節では、そうした彼の相撲観に一定の影響を及ぼしたであろう外地経験について若干の検討を加えたい。

## (2) 笠置山の外地経験

笠置山が相撲界に入った1930年代前半は、日本のアジアへの勢力伸長に歩調を合わせるように、植民地朝鮮から満洲の各地域を巡る大相撲の大陸巡業（いわゆる「満鮮（鮮満）巡業」）が活発化した時期であった。さらに1936年（昭和11）からは、関脇からのちに横綱となる双葉山の記録的な連勝などで日本社会の相撲ブームは最高潮に達し、外地の日本人社会でも大相撲の人氣が一気に高まった。そのため協会は、36年以降1943年（昭和18）まで毎年欠かさず大陸巡業を実施したほか、1937年（昭和12）からはそれに付随する形で中国における日本軍の駐屯地や占領地への「皇軍慰問」もおこなうようになった<sup>10)</sup>。

資料上で見る限り、笠置山は1933年（昭和8）年夏に新十両として初めて大陸巡業に参加、その後も35～36年、38～43年と少なくとも計9回は朝鮮・満洲方面に渡航しており、その経験をたびたび旅行記やエッセイとして書き残している。

笠置山が外地の相撲熱の高まりを最初に目の当たりにしたのは、彼にとって3度目の参加となる1936年（昭和11）の「満鮮巡業」（6月12日～7月31日）である。これは朝鮮の釜山から京城を経て、中国の旅順、大連、満洲国各地まで、全行程5500キロを2ヶ月近い日程で回るといふこれまでにない大規模なものであった。

彼は釜山から馬山、大邱、浦項、京城と進むうちに、各地の小・中学校に次々に土俵が作られている状況を目の当たりし、「急に相撲の勢の盛んになってきたこと」<sup>11)</sup>を実感したという。これは同年6月に文部省が「学校体操教授要目」を改正し、これまで小学校で課外運動とされていた相撲を、小学校の体育教材のひとつとして正課に採用したことが背景にあらう。内地と同様に植民地の教育現場でも、本格的な相撲指導が求められていたのである。

しかし、村祭りなど地域社会の伝統行事で誰もが幼少時から相撲に親しむ内地と異なり、植民地社会には当然のことながら日常的に日本の相撲を取る機会が少なく、アマチュア相撲の土壌がない。そのため朝鮮滞在中の笠置山のもとには、教育現場の相撲指導者不足のほか、体系的な指導書の欠如などを訴える日本人が多く訪れたようである<sup>12)</sup>。さらに1942年（昭和17）には国民学校初等科5、6年に加え、高等科1、2年男子の「体操及遊技競技」の一つとして相撲が導入されたため、外地の指導者問題は喫緊の課題となった。笠置山は同年、雑誌の座談会で次のように述べている。

ところがそこにもう一つやって欲しいのは指導ですね。観せて来るといふばかりではなく、観せて学ばせる。観て学ぶということが必要になって来ていると思う。（中略）朝鮮なんかに行つては特にそうです。満洲には新しい相撲が出来ているし、内地は地方に行つて見ると、相当に地方の力士などがいるが、朝鮮には全然ないのです。（中略）協会というものは全国に廻つて行く力があるのだから指導力をもう少し拡充して巡業しながら指導して行くということにならなければいけないと思うですよ<sup>13)</sup>。

次章で述べるように、1940年代の満洲国には協会と相撲観を異にする日本人によって「角道」と称する新型相撲が形成されていたが、朝鮮にはそのような動きはなかった。国技相撲の普及と力士の地位向上をめざしていた笠置山からみれば、現役力士や引退後の力士が指導者として活躍できる可能性が朝鮮にはあったといえる。しかしそれにもかかわらず協会が外地での相撲教育に一向に関心を示そうとしない点に、彼が不満を感じていたのは確かである。

こうした外地の相撲事情については、彼は現地でおこなった講演活動を通じて直接見聞した部分も多いようだ。特に朝鮮の日本人社会からは講演依頼が多く、たとえば1941年（昭和16）夏の鮮満巡業では、釜山中学で「日本の国技相撲の起こり」から「今後の相撲の使命」まで、1時間40分ほど「講義」した<sup>14)</sup>。続いて訪れた京城でも、「京城の六日間は相撲より講演に来たようであった」<sup>15)</sup>と述懐するほど講演に追われた。講演先は京城師範学校、朝鮮殖産銀行、京畿公立商業学校、警官講習所、総督府鉄道局などで、早稲田大学の恩師や同窓生から頼まれる場合も多かった。もともと苛酷な日程が組まれている巡業中にこうした業務が加わった結果、彼は「稽古もする暇もないほどの苦しみ」<sup>16)</sup>を感じたという。「他の者が宿舎で身体を休めている時に自分だけがそんな苦しみをして、時には嫌だなど云う気分」<sup>17)</sup>になることもあったようだ。

しかし同時に、彼にとって講演活動は「一つの使命」と感じるような、達成感のあるものだった。特に社会人を対象にした講演では、「日本人が、国技と云っている相撲を余りに知らない」ことに驚き、外地に住む彼らに相撲の歴史や「日本精神」を語る意義を見いだしたからである。また釜山では、相撲を全然知らない若者たちが、内地の旧態依然とした興行中心の大相撲、いわゆる「歌舞伎的相撲」ではなく、「純であり清らか」な相撲をイメージしているのを知って感銘を受ける。彼にとっては「この純な清らかな相撲こそ、今後の国技相撲の進むべき道」と思えたという<sup>18)</sup>。

このように現役力士として外地巡業や講演活動を数多く経験した笠置山は、それらの見聞を通じて内地の相撲を相対化する視点を手に入れたと考えられる。それは協会幹部や他の力士には持ち得ないものであった。戦時期の相撲に、国家に奉仕する国技であることを求めるとするなら、それはおそらく大日本帝国という枠組みを前提に相撲を再考する必要がある。異民族も居住する帝国のどの地域においても普遍的に受け入れられる国技相撲とは、娯楽色濃厚な内地の大相撲の旧弊にとらわれない「純粋な相撲」、つまり原理的かつ「国家的」な相撲でなくてはならないということである。

こうした時代状況に対応するには、日本で唯一のプロ集団である協会と所属力士がまず先頭に立ち、国技相撲の再構築および普及・啓蒙という指導的役割を果たすべきである、というのが笠置山の主張の根本となった。彼が満洲国の「新しい相撲」や、興行色を抑えた形式の「満洲場所」に「純粋な相撲」の兆しを見いだすことになるのも、そうした国技相撲観に基づくものであるといえよう。次章では、彼の国技相撲観を、同時代の政治家や相撲指導者のそれと比較し、検討を加える。

## 2. 国技相撲と笠置山

### (1) 相撲は武道か

1937年（昭和12）の日中戦争勃発前後から、日本国内では政府の体育振興団体である大日本体育協会（現在の日本体育協会）を中心に、国民の体位向上をはかるため国民体育振興策の検討が始まっていた。1941年（昭和16）からは近衛内閣の新体制運動のもと、スポーツ界の再編成がすすみ、個人主義的なスポーツとみなされた競技は明治神宮大会（現在の国民体育大会）の種目から除外されるなど、国防国家への貢献度でスポーツ競技の価値をはかるようになった。

そうした状況下で、柔道、銃剣道、剣道などの武道は、実践に通じる国防競技として一層重視された。1942年（昭和17）には戦争翼賛団体として改組された大日本武徳会が発足、厚生省に事務所を設置し国家主義的な武道の振興をはかった。武道は日本精神を鼓吹する「武士道」に直結するものとして脚光を浴びることとなる<sup>19)</sup>。

しかしこのような戦時下のスポーツ界再編の動きのなかで、日本の伝統的な競技であるはずの相撲は依然として大相撲の娯楽イメージを払拭できず、武徳会が扱う武道の種目にも含まれなかった<sup>20)</sup>。本章3節で後述するように、1940年代の大相撲は満洲場所を本場所並みの規模で挙行したり、皇軍慰問を実施したりすることによって、国技相撲の宣揚という役割をかるうじて果たしていたにすぎない。そもそも単なる興行団体だった東京相撲と大阪相撲が合併し、1925年（大正14）に財団法人大日本相撲協会が設立された背景には、当時の皇太子（のちの昭和天皇）が相撲を好んだことを知る頭山満や杉山茂丸などの国家主義者が、国技の普及・教化をはかるため、宮中や皇族とのパイプ役を務めた結果実現したという独特の経緯があった。以来大相撲は国技相撲の教化団体として、興行中心の実態とはかけ離れた特権的地位を得て安定化に成功したが、同時に国技でありながら武道ではないという、理想と現実の乖離を埋められない状態が続いていたのである。

こうした大相撲のありように対し、国技にふさわしい品格とナショナルスティックな精神性を求めた代表的な人物が、日本自由党の衆議院議員藤生安太郎である。藤生は1895年（明治28）佐賀県生まれ。自身も柔道の有段者の彼は相撲を武道と認識しており、戦時国策に沿う相撲精神の普及徹底を唱えた。そんな藤生の目には、大相撲は「ヤヤモスレバ熱狂的人気ニ馴レテ興味本位ノ見世物ニ墮シ、力士ニ「士」タルノ風格ナキニ至ラン」<sup>21)</sup>と映った。1942年（昭和17）の第79回議会でも、藤生は「国民体力法中改正法律案」の審議上、大相撲は「健全ナル娯楽」ではあるが、「アノ相撲ヲ武道ダト言ウヨウナコトハ断ジテ許サレナイ」し、「武道ト云ウモノノ尊厳神聖ト云ウモノガ冒瀆サレルコトヲ惧レル」<sup>22)</sup>と協会を痛烈に批判した。

これに対し笠置山は雑誌の紙面で、「相撲は立派に、如何に両国の相撲であっても武道として存在するものと私は思う。要は行う者の心である。」「両国の相撲でも、相撲そのものは武道でなくてはならないのである」と反論した。彼は続けて、9世紀に在位した仁明天皇が相撲を

「武力を簡練する」ものと記したことを示し、当時から「立派に武技であった」と主張、「改めるのは、観客の相撲観であり観客的態度であり、協会当事者の職業的態度でなくてはならない」<sup>23)</sup>と述べている。

これらの藤生と笠置山の論戦は、赤澤史朗がいうように「相撲は本来武道である筈だという議論」<sup>24)</sup>である。ところが彼らに限らず「相撲武道論」を唱える者の主張はいずれも歴史的根拠も曖昧で、どこにどのように「復古」すべきかを明確にして論ずることは困難だった。そもそも笠置山自身は現状の相撲のあり方を「過渡期的なもの」ととらえ、「徐々に新しい時代に即応する、所謂脱皮作用を行おう」とする立場に立っており、性急な議論に積極的ではなかった。しかし同時に、社会情勢を鑑みると「漸進的な改革では間に合わないといったような急迫した事態に追い迫られている」<sup>25)</sup>ことも実感していた。そのため笠置山自身にも忸怩たる思いがあるようで、彼の次のような一文からはその苛立ちが垣間見える。

相撲に対する正しき相撲とか、正しくない相撲とか、両国の相撲がどうだ、と云いながら、それだけで終って、正しき相撲は斯うしてほしい、と言っていない。(中略) 問う人も答える人も、問うだけのために問い、答えるだけのために答えであるように思われるのは、私が政治と云うものに暗いためだろうか<sup>26)</sup>。

しかしたとえ空疎で観念的な武道論であったとしても、協会に批判的な世論が高まるなかで、国技相撲の本質という議論のテーブルにつける大相撲関係者は笠置山ただひとりであった。笠置山の孤軍奮闘ぶりについては、「よし笠置山勝一が相撲は武道也とその高邁な精神を説いても、協会という団体から湧き出る印象は武道の本殿ではなくして今も昔もかわらぬお相撲さんの印象である」<sup>27)</sup>と世間の目にも映っていた。雑誌『野球界』の社説は、たとえ「芸妓連れの旦那連中が、飲食の間に享樂する」大相撲が一掃されたとしても、「それは決して協会でもなければ誰でもない。凡てが支那事変から大東亞戦争へと連続する日本の国防国家建設体制がさせたことではないか」<sup>28)</sup>と述べて、時局に対応できない協会の無策ぶりを痛罵した。

## (2) 佐渡ヶ嶽高一郎の国技相撲

一方、協会とは一線を画した形で時局に適応した国技相撲のありようを模索し、体系化と普及活動を実践したのが、佐渡ヶ嶽高一郎である。

佐渡ヶ嶽高一郎は1897年(明治30)生まれ、本名は永井高一郎。17才で初土俵、阿久津川というしこ名で活躍し、最高位は前頭筆頭、1929年(昭和4)に引退して年寄佐渡ヶ嶽を襲名した。1923年(大正12)頃から、協会に籍をおきながら個人活動として青年相撲の指導を開始、1930年(昭和5)に相撲の型に基づく「相撲基本体操」を完成させた。その後1930代前半の学童相撲ブームを受けて、協会はこの基本体操を公認したため、佐渡ヶ嶽は協会の普及部長として日本各地の学校や工場、青年団などで講習会を開催、多くの受講生を得た。

この体操を相撲入門の第一歩と考え、相撲指導の体系化、組織化の必要性を実感した彼は、受講生らとともに1936年（昭和11）、「正しい相撲指導法の確立」と「指導法の普及徹底」を目的とした大日本国技研修会を設立し、代表者となった<sup>29)</sup>。

同会は佐渡ヶ嶽の埼玉県川口市の自宅に本部を置いたが、会員たちの「神聖自ら襟を正すべき相撲由緒の聖地に、正しき相撲を錬成すべき道場をうち建てたい」という要望を受け入れ、1941年（昭和16）、私財1万数千円を拠出して長野県戸隠高原（現・長野県長野市戸隠）の越水ヶ原に3000坪の土地を購入、本部にあった方屋を移築して「大日本国技研修会戸隠山相撲道場」を設立した。道場は「天の岩戸」神話で知られる戸隠神社に隣接しており、力の神とされるアメノタヂカラオを祀っていることから、彼はここを「相撲発祥の霊地」と定めた。この土地の選定には協会顧問で相撲評論会の彦山光三の示唆があったといわれている<sup>30)</sup>。同年5月、地元の国民学校や青年団の勤労奉仕による整地ののち、土俵場、運動場、講堂が完成、7～8月に3回にわたり相撲講習会が開催され、のべ260名以上の受講者が集まった<sup>31)</sup>。

佐渡ヶ嶽は相撲を「相撲道」と称し、これを「真心と体力と気力の日本的調和を最高度に具体化した心身一如の鍛錬道」だととらえた。そして相撲道を通じて「誠忠至孝、礼儀に篤く、勇敢を尚び、順理を弁え、反省を念とする」「日本精神」を具体化し、「国運の伸展に寄与」することを目標とした<sup>32)</sup>。

彼の相撲指導では、初心者にはまず『土俵外に出す』技を本体として基礎的修練を積むべきであり、たとえ相手より体格が劣っていようと、押すか突くかによって相手を土俵外に出す「出し技」を最善の方法だとした<sup>33)</sup>。その一方で、大相撲では常套手段であるを取る型を禁止した。彼によれば禪をとることは、自由な攻め技が出なくなるし、重心が浮いて体勢が崩れやすいだけでなく、「兎角不利の戦闘に陥り、明快闊達なる国民精神の昂揚を妨げ易い」から、技術面でも精神面でも国技相撲にふさわしくないものだった。

また「外掛け」についても、倒れたときのケガの危険性があるため禁じ手とし、さらに行司の勝負判定に対して控えの力士が異論を唱える「物言い」も一切禁止とした。物言いに関しては、当時の文部省体育局振興課長も「行司の軍配に抗議を申入れるのは極めてみにくい。服従の精神こそ今日の時局においては国民各層にとって必要な心構えである」<sup>34)</sup>と述べており、佐渡ヶ嶽と価値観を共有している。このように佐渡ヶ嶽の相撲指導がめざしたのは、当局が望む「武道のイデオロギー化」<sup>35)</sup>に歩調を合わせるような「国技相撲」の模範的实践であった。

このように佐渡ヶ嶽が精力的な相撲普及活動を展開できた背景には、東京高等師範学校教授大谷武一の熱心な支援があった。大谷は1937年（昭和12）制定の「建国体操」作成において中心的な役割を果たした学校体育の専門家である。「建国体操」は、日中戦争期の国民精神総動員運動の一環として団体訓練や国民意識の昂揚を目的として造られた官製の集団体操で、当時増産された多種多様な集団体操の先鞭をつけるものでもあった<sup>36)</sup>。このような「国民体育」推進者の大谷には、佐渡ヶ嶽の相撲論と共鳴する部分があったようで、文部省の体育研究所の技師として勤務していた1930年前半ころに佐渡ヶ嶽と面識をもって以降、その指導理論を体



育学的見地から「正しいシステムを造り上げている」<sup>37)</sup>と高く評価するようになったという。1942年（昭和17）、相撲は国民学校体錬科教授要目に導入され、教育現場で本格的な相撲教育が実施されることとなったが、それは佐渡ヶ嶽の相撲指導論を支持する大谷の主張が色濃く反映された結果だと考えられる<sup>38)</sup>。

さて、こうした佐渡ヶ嶽の相撲論を笠置山はどう評価したのだろうか。1943年（昭和18）の雑誌対談で、彼は佐渡ヶ嶽の指導法に異議を唱えている。たとえば佐渡ヶ嶽が禁止する外掛けについては、技をかける方ではなくかけられる側が「外掛けをかけられても怪我をしないような方法」を考えるべきであり、そのためには「転ける」稽古をまずおこなうほうがよいとする。彼にとって外掛けの技は「自然の行為」であり、これを禁止するのは「一番いけないことで、興味というものがなくなって来る」ため、「禁止しない主義」<sup>39)</sup>なのだという。続けて彼は教育現場の相撲指導が「相撲というものを小さなもの」にしてしまうことを危惧し、次のように述べている。

相撲というものは、人間の動きを束縛しない、実に自由に人間のあらゆる動き方を許している、これが他の武道やスポーツと異なった点です。つまり一番やかましく規定しているのが土俵という円内、これほど戦うべき場所としての厳格な規定はない。その中に於いては、人間の持っているあらゆる力、あらゆる動きを利用していい訳です。その動きを利用すればするほど、相撲というものの進歩がある訳で、そこに価値があると思う<sup>40)</sup>。

さらに彼は、国民への相撲指導はプロの力士を養成する場合とは異なるのだから、そこに「喜び」や「愉快さ」「心の広さ」が必要不可欠だとして、次のように言う。

私にいわせれば、どうしてもそこに半分は興味がなくちゃならない、そうして自由さがなくちゃならない。相撲を取る時の喜び、この気持ちを分解してみると、先づ裸になるという愉快さですね、人間は物を着れば着るほど不愉快になって来る。全部素っ裸になって解放された時の気持、その時に心の広さが出て来る、明るさが出て来る、そこで相撲というものが自由に取れる<sup>41)</sup>。

すでに赤澤史朗が指摘しているように、笠置山の相撲論には「自由と個性の重視」<sup>42)</sup>という特徴があり、これが同時代の他の相撲論と異なる点である。また笠置山には、体育学的な側面から相撲を客観的にとらえる視点がある。相撲は体格差、体重差が勝敗を左右する競技であるうえ、相撲の鍛錬だけでは体育学的にも医学的にも万全ではないため、他のスポーツの実践を推奨している。

一つのものだけで自分の身体を鍛えて行くということはそれは非常に欠陥がある、そう

いう点から考えて結局自分の持っている個性ですネ、この体育的個性を順次に活かして行く、同時に自分の持って居る一番の欠点ですネ、この欠点の所を補うような一つのスポーツをやらにゃいかん<sup>43)</sup>。

以上のような笠置山の一連の言説から、大正期の自由主義的な体育観の影響を読み取ることも可能であろう。また、笠置山自身も『相撲範典』（野球界社、1942年）、『相撲』（旺文社、1943年）などの相撲解説本を出版しているが、それは基本的にプロの力士がおこなう基本練習や相撲技術を、簡潔かつ丁寧な説明で解説した内容が中心で、佐渡ヶ嶽のような時勢に沿った禁止ルールの設定などはしていない。つまり彼の相撲論には、この時代の「武道のイデオロギー化」から自由な側面があり、同時に相撲を他のスポーツと比較しようとする横断的で相対的な視点が保持されていた。土俵上の自由や個人の喜びを重視するという笠置山の相撲論は、土俵で「日本精神」を具現化すべく出し技に徹する佐渡ヶ嶽の相撲観とは、本質的に相容れるものではなかった。

とはいえ、現役幕内力士として活動する笠置山にとっては、これらの理想論とは別に、大相撲の国技相撲化という直近の課題への対応に迫られていた。興味深いことに笠置山は、大相撲についても「実際に相撲そのものは完全な個人の問題」であると断言している。取組の形式上「東西対決」という「集団」で勝負に臨んでいるが、それはあくまで形式にすぎず、基本は「自分個人の勝負」であるから、「今日の国家的に要求している集団的なものは駄目か知れませぬ」<sup>44)</sup>とまで述べている。それではこのようにそれぞれの力士が「個人としての完全な役割」を果たし、その姿を観客に見せることが大相撲の責任だと考える彼にとって、「新しい大相撲」とはどのようなものだったのだろうか。

### (3) 「新しい相撲」の模索

1940年（昭和15）7月、満洲国で内地の本場所とほぼ同規模の「大相撲満洲場所」が開催された。これは満洲国在住の相撲指導者で元力士の和久田三郎が協会に提案、関東軍の後援によって実現したものである。会場は鞍山、撫順、奉天、ハルビン、新京の5ヶ所で計15日間開催された。協会所属の力士が一同に会した「準本場所」並みの充実した内容だったせい、連日盛況で、特に新京初日には数千人の観客でにぎわったという。

さて、既述のように1930年代から何度も大陸巡業に参加している笠置山にとっても、この満洲場所はこれまでとは一線を画す形式と内容だった。それは従来興行のような花相撲から一変し、本場所同様の真剣勝負をおこなうこと、純益は軍の恤兵費や慰問費、地元の相撲振興事業に寄付すること<sup>45)</sup>、力士たちは学校や職場に赴き相撲指導をおこなうことなどの改革策が実施されたからである。「大日本相撲協会の営利のみを眼目としたものでなく、満洲国国民の体位向上と、相撲精神に依る精神的指導の爲め」<sup>46)</sup>の興行は、かねてより笠置山も望んでいたことであった。

一方で彼はこの満洲場所に、いくつかの改善点を見いだしていた。まず、5地点での興行を合わせて15日の準本場所とする方式である。場所中の移動は力士には負担となるし、何よりも「正形的」ではないため、奉天、新京のみで15日間挙行してはどうかと提案している。

次に「観客が、まだ相撲を知らない」という点に彼は驚いている。とりわけ鞍山では、土俵に上がる前には拍手や声援があるものの、勝負がついたあとは反応がなかったという。実は観客は、従来までの余興のような花相撲を期待していた。飛びつき（勝ち抜き戦）や初っ切り（禁じ手を滑稽なやりとりで紹介すること）がなく、通常のみ組みだけで進行したため、「余りにあっけない勝負」ばかりと受け取られたのだろう。笠置山が「よく満洲場所の説明をし、力士が昔の花相撲的な気分から離れて、本場所のような気持ちでとっているからです」と話すと、やっと理解してくれたという<sup>47)</sup>。協会の公式報記録では、鞍山の興行も「拍手、歓声は絶間もなく」<sup>48)</sup> 盛況のうちに終わったと書かれているのだが、内実は笠置山の記した通りだったのかもしれない。

その3年後の1943年（昭和18）、満洲場所を終えた笠置山は、春日野親方とともに遼陽の相撲場に赴き、土俵開きと記念式に出席、青年・軍人の対抗試合を見学したのち選手らに実地指導をおこなった<sup>49)</sup>。このときの試合は、和久田三郎が所属する満洲帝国武道会角道部の試合規定に従って実施されている。当時和久田は、3年前に内地から彼を頼って来たアマチュアの相撲指導者、八尾秀雄とともに満洲における学童相撲の普及に努めていた。彼らが相撲を「角道」と称したのは、相撲を武道ととらえ、新天地満洲で内地の旧弊にとらわれない科学的かつ教育的な相撲を「純然たる日本武道」として復活させるためであった<sup>50)</sup>。

初めて角道部の試合規定を実地に見学した笠置山は、「和久田氏が一つの信念を固持されて前進されていることを知って嬉しかった」「将来の国民錬成相撲に示唆する点もあった」「これも今日の時代の姿であり、時代を負う者の姿である」と肯定的に評価している。

しかしその一方で、「新興満洲国らしい新しさの中にある欠点も目についた」<sup>51)</sup>とも述べている。それは、たとえば行司を司審と呼ぶなど、「徒に日本の名詞や動詞を、それを職業臭いとして新しくすることが新しい相撲だと解する」ことや、選手は一度土俵に上がると、司審の号令にすべて従うといった、「個人を出来る限り伸ばす」という相撲の美点を顧みないルールのことを指している。笠置山は相撲の刷新という点では和久田の角道を支持しており、満洲人などの異民族への指導を視野に入れた相撲のルール化には異論を唱えてはいない。しかし、あたかも海軍相撲のような「唯、命令に依って無茶苦茶に突き進む突撃精神を養成すればよいとの観点」に対しては、「全幅の賛意を表しかねる」というのである<sup>52)</sup>。ここでも笠置山の言説には、相撲を取る際の個人の自由な精神や身体感覚を優先しようとする主張がうかがわれるが、ならば原理的で急進的な満洲の「角道」は、これからどのような道を選ぶべきなのだろうか。笠置山は次のように言う。

満洲人に相撲を普及する為に日本のままではどうかと云うのなら、その指導精神は大

変親切ではあるが、無駄なことだと思う。それは満洲人自分達で日本の相撲を受け入れて、満洲国の民族性と生活様式に合うようにすべきである。又、日本の相撲がそのまま受け入れた方がよいのであれば、それをすべて受け入れればよいのである<sup>53)</sup>。

和久田たちのドラスティックな「新しい相撲」もまた、彼からみれば「徒らに新を追わんとする点」があり、「何となく時代に迎合し過ぎた様に思われる」<sup>54)</sup>ものだった。「新しい相撲」が「帝国の国技」たるには、笠置山のいう土俵上の精神的な自由と、自己の身体から発露される解放感こそが、その普遍性を担保するために必要な要素だったのである。結局、笠置山が違和感をもった満洲の角道は、日本の敗戦と満洲国の崩壊後、存続の道を失い、姿を消すことになる。

## おわりに

笠置山は1945年（昭和20）の秋場所で現役を引退し、年寄秀ノ山を襲名、その後も協会理事として「公認相撲規則」（1955年）の制定に尽力するなど、大相撲の中心的役割を担った。一方、佐渡ヶ嶽高一郎は、協会内の相撲普及活動を担当する部署である指導部が廃止されたことに反発、これを「法人としての本質を失い、社会を欺瞞するに等しい行為」<sup>55)</sup>と批判して1955年（昭和30）に協会を引退した。その後彼は、財団法人日本国技研修会（大日本国技研修会の後身）会長に就任、青少年を対象にした相撲道の普及に努めた。

結局、現在の大相撲界とアマチュア相撲をみる限り、戦前の笠置山が理想としたような、プロの力士が指導的立場に立って相撲の普及に務め、多くの国民が自ら相撲を取るという「国技の実践」が実現したとはいいがたい。佐渡ヶ嶽のめざした武道としての相撲道もまた同様であった。

かくして大相撲は、1966年（昭和41）に財団法人日本相撲協会と名称を変更したのちも、戦前から続く興行主体の活動を依然として維持している。活動内容の是非はまずはおくとしても、協会が主催する大相撲興行を「国技」ととらえるナショナルな意識が日本社会に確実に根づいているのが現状であれば、その意味を何度も問い直していく知的な作業が今後も必要であろう。そのとき、戦時期の大相撲の現場に立ちながら、ひとり「国技相撲論」の応酬を受け止めようとした笠置山の存在とその言説が、ひとつの指標となることは確かである。

## 【注】

- 1) 赤澤史朗「戦時下の相撲界 — 笠置山とその時代 —」『立命館大学人文科学研究所紀要』75号、2000年、および新田一郎『相撲 その歴史と技法』公益財団法人日本武道館、2016年。特に赤澤論文は、笠置山の戦時期の言論活動を初めて歴史学的に分析したものである。
- 2) 高石季男「笠置山の中学時代」『野球界』第32巻第9号、1942年、81-83頁。
- 3) 財団法人日本相撲協会博物館運営委員監修『近世日本相撲史』第1巻、ベースボール・マガジン社、1975年、291頁。
- 4) 前掲 赤澤史朗、140頁。
- 5) 同上。
- 6) 「相撲対談」『野球界』第31巻第12号、1941年、48頁。
- 7) 「大東亜戦争と相撲 対談」『野球界』第32巻第3号、1942年、25頁。
- 8) 笠置山勝一「相撲の伝統と錬成」『野球界』第31巻第14号、1941年、42頁。
- 9) 宮川剣逸「笠置山論」『野球界』第31巻第12号、1941年、60頁。
- 10) 大相撲の海外巡業と皇軍慰問については、胎中千鶴「帝国日本の相撲」『現代思想』第38巻第13号、青土社、2010年、186-188頁、および胎中千鶴「戦場と相撲」『目白大学人文学研究』第12号、2016年、131-146頁を参照。
- 11) 笠置山勝一「鮮満巡業雑感」『相撲』第1巻第5号、1936年、34-36頁。
- 12) 同上。
- 13) 「座談会 相撲界の新動向を語る」『野球界』第32巻第21号、1942年、32頁。
- 14) 「お関取大陸錬成回覧板」『野球界』第31巻第19号、1941年、134-135頁。
- 15) 笠置山勝一「満鮮旅の覚え書」『野球界』第31巻第18号、1941年、117頁。
- 16) 同上。
- 17) 笠置山勝一「満洲場所雑感」『相撲』第5巻第10号、1940年、18-19頁。
- 18) 前掲「満鮮旅の覚え書」、117頁。
- 19) 坂上康博「武道界の戦時体制化—武道綜合団体「大日本武徳会」の成立」坂上康博・高岡裕之編著『幻の東京オリンピックとその時代』青弓社、2009年、243-278頁。
- 20) 同上。
- 21) 藤生安太郎『相撲道の復活と国策』大日本清風会、1938年、282頁。
- 22) 「第六類第九号 国民体力法中改正法律案外四件委員会議録 第六回」（昭和17年1月30日）。
- 23) 笠置山勝一「現代相撲道批判」『野球界』第32巻第10号、1942年、14-15頁。
- 24) 前掲 赤澤史朗、91頁。
- 25) 笠置山勝一「決戦体制下における相撲道」『野球界』第32巻第1号、1942年、12頁。
- 26) 前掲 笠置山勝一「現代相撲道批判」、16頁。
- 27) 友田純一郎「相撲の社会的地位」『野球界』第32巻第24号、1942年、21頁。
- 28) 「社説 相撲は武道なり」『野球界』第32巻第12号、1942年、11頁。
- 29) 根岸国治「本会のあゆみ（1）」『すもう研修』（非売品）財団法人日本相撲研修会、1955年、44-49頁。
- 30) 中山徳重「国技研修会の設立と戸隠道場の由来」『国技研修』第1輯、大日本国技研修会、1942年、12-17頁。
- 31) 飯島勝雄「戸隠山相撲道場記」『国技研修』第1輯、大日本国技研修会、1942年、23-29頁。
- 32) 佐渡ヶ嶽高一郎「相撲指導総論」『国技研修』第1輯、大日本国技研修会、1942年、30-32頁。
- 33) 佐渡ヶ嶽高一郎「相撲道教本」大日本教化図書、1941年、14頁。
- 34) 北澤清「大相撲管見」『国技研修』（非売品）大日本国技研修会、1943年、8-9頁。
- 35) 井上俊『武道の誕生』吉川弘文館、2004年、158-163頁。
- 36) 大谷武一と建国体操に関しては、佐々木浩雄「量産される集団体操—国民精神総動員と集団体操の国家的イベント化」坂上康博・高岡裕之編著『幻の東京オリンピックとその時代』青弓社、2009

- 年、405-444頁、を参照。
- 37) 大谷武一「相撲と体育」『野球界』第32巻第9号、1942年、21頁。
  - 38) 鶴岡英吉「相撲が学校体育の正課となった頃」『すもう研修』（非売品）財団法人日本相撲研修会、1955年、15-18頁。
  - 39) 「相撲に就いて」『相撲と野球』第33巻第19号、1943年、222-3頁。
  - 40) 前掲「相撲に就いて」、24頁。
  - 41) 同上。
  - 42) 前掲 赤澤史朗、145頁。
  - 43) 「大東亜・新らしき相撲道」『野球界』第32巻第5号、1942年、39頁。
  - 44) 前掲「大東亜・新らしき相撲道」、36頁。
  - 45) 和久田三郎『相撲一路』国防武道協会、1943年、161頁。
  - 46) 前掲「満洲場所雑感」、18-19頁。
  - 47) 同上。
  - 48) 「昭和十五年満洲場所記録」『相撲』第5巻第4号、1940年、4-5頁。
  - 49) 笠置山勝一「大陸相撲行」『相撲と野球』第33巻第20号、1943年、71頁。
  - 50) 和久田三郎・八尾秀雄『角道教習指針』満洲帝国武道会、1941年、16-17頁。
  - 51) 前掲「大陸相撲行」、71頁。
  - 52) 笠置山勝一「満洲の角道」『相撲と野球』第33巻第7号、1943年、52-56頁。
  - 53) 同上。
  - 54) 同上。
  - 55) 永井高一郎「復刊に際して」『すもう研修』（非売品）財団法人日本相撲研修会、1955年、10-11頁。

(平成28年12月13日受理)